觀堂
文庫

海音半二
山雲宗輔

傑作集

全

大正三年八月七日印刷
大正三年八月十日發行

有朋堂文庫
海音半二
出雲宗輔 傑作集
（非賣品）

東京市神田區錦町一丁目十九番地
編輯兼發行者 三浦理

東京市本所區番場町四番地
印刷者 平井登

東京市本所區番場町四番地
印刷所 凸版印刷株式會社分工場

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所 有朋堂書店

不許複製

岡山製本）

緒言

元祿の頃大坂に操座二つあり、竹本義太夫の竹本座、豐竹越前少掾の豐竹座是なり。而して竹本座付の作者には近松門左衞門あり、豐竹座には紀海音ありて、盛に新作を出し、脚色の巧と行文の妙を競ひて互に相頡頏せり。近松の後を承くるものを竹田出雲とし、出雲に次ぐものを文耕堂、三好松洛、近松半二等とす。海音の後には西澤一鳳、並木宗輔、淺田一鳥の諸家あり、各〻文鋒を磨き趣向を凝せり。其内近松を除きて、尤も有名なるは、海音出雲宗輔半二是なり。今此四氏の傑作と認むるもの、九篇を擇びて本集に收めぬ。其文近松に及ばずと雖も、脚色變化の妙を極めて感興を惹くこと多く、隨つて其の生命の斯界に不朽にして今猶寄席に操に國民の感情を支

配しつゝあるは、人の知る所なり。近松海音は其の作に獨自一己の力に成れども、出雲宗輔の時より、衆智を集めて一篇を作成する例を開けり。卽ち一の作を出さんとするに、豫め一篇を數齣に分ち、立作者卽主住者より幾人の作者に配當して文を綴らしめ、各自作り了れば、一席に持ち集りて會讀し、互に論難改竄して以て完璧のものとなす。當時丸本の末に、主任者の名を筆頭として、數名の連署あるは是が爲なり。

今本集に收めたる九種の篇名及びその初めて登場せる年月、作者の氏名を擧ぐれば左の如し。

菅原傳授手習鑑（十行本）延享三年　竹田出雲、三好松洛、並木千柳

義經千本櫻（七行本）同　四年　同

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

假名手本忠臣藏（七行本）寛延元年八月十四日　同

關取千兩幟（七行本）明和四年八月四日　近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出、八民平七、竹本三郎兵衛

妹脊山婦女庭訓（七行本）同　八年正月廿八日　近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南、後見三好松洛

伊賀越道中雙六（七行本）天明三年四月廿七日　近松半二、近松加作

八百屋お七（九行本）寶永元年　海音

心中二つ腹帶（十行本）享保七年　同

一谷嫩軍記（十行本）寶曆元年　並木宗補、淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏、豐竹甚六

右題目の下の括弧内は、校正の原據とせる丸本の種類を示したるものにして、本文は一に之に隨ひて嚴密に校訂し、漢字送假名等もつとめて舊體を存せり。但假名の多き所に聊か漢字を配し鈎識を施して地の文と詞を

區別し、難解の語句に頭註を施したるは校訂者の新に筆を加へたる所なり。

大正三年六月

校訂者　忠見慶造

出雲半二 海音宗輔 浄瑠璃傑作集 目録

菅原傳授手習鑑（すがはらでんじゅてならひかがみ） 一―一〇二

第一……一
第二……二七
道行詞の甘替（みちゆきことばあまいかい）……二七
第三……五三
第四……七五
第五……九八

大物船矢倉吉野花矢倉義經千本櫻（よしつねせんぼんざくら） 一〇三―二〇六

第一……一〇三
第二……一二五
第三……一四八
第四……一七五
道行初音旅（みちゆきはつねのたび）……一七五
第五……二〇二

假名手本忠臣藏（かなでほんちうしんぐら） 二〇七―三〇六

第一……二〇七
第二……二一一
第三……二一八
第四……二二九
第五……二三七
第六……二四三
第七……二五六
第八……二七〇
道行旅路の嫁入（みちゆきたびぢよめいり）……二七〇
第九……二七二
第十……二八六
第十一……二九九

關取千兩幟（勝負附貳枚續）　三〇七——三七三

第一……三〇七
第二……三二四
第三……三三四
第四……三三七
第五……三四八
第六……三五二
第七……三六一
第八……三七二
第九……三七三

三七五——四七六

第九……三七五
第二……三九八
第三……四二〇
第四……四四三
道行戀のおだまき……四五二
第五……四七四

伊賀越道中雙六　四七四——五八二

第一　鶴が岡の段……四七七
第二　行家屋敷の段……四八三
第三　圓覺寺の段……四九一
第四　郡山宮居の段……五〇二
第五　郡山屋鋪の段……五〇九
第六　沼津の段……五二四
第七　關所の段……五三八
第八　岡崎の段……五四六
第九　伏見の段……五六八
第十　敵討の段……五七九

八百屋お七　五八三―六一六
上之巻……五八三
中之巻……五九九
下之巻……六〇九
八百屋お七江戸櫻……六一三
心中二ツ腹帶　六一七―六五六
第一……六一七
第二……六二八
第三……六三六
道行ほしのかず……六四八
道行ほしのかず　六五七―七五四
第一……六五七
第二……六七六
第三……六九九
第四……七二七
道行花の追風……七二七
第五……七四九

出雲半二
海音宗輔
浄瑠璃傑作集索引……七五五―七七四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

菅原傳授手習鑑

第一

有し御神詠、末世に傳へて有がたし。と顯はれ、珊々たる羅浮山の梅、夢に清麗の佳人奉り、文學に達し、筆道の奥儀を極め誠の木精ならんや。唐土許か日の本にも、人を以奉り、文學に達し、筆道の奥儀を極容に准れば、花にも情天滿、大自在天神の御自愛有し御神詠、末世に傳へて有がたし。此神いまだ人臣にまします時、菅原の道眞と申奉り、文學に達し、筆道の奥儀を極め給へば、才學智德兼備り、右大臣に推任有、權威に漫る左大臣、藤原の時平に座を列ね、菅丞相と敬はれ、君を守護し奉らる、延喜の御代ぞ豐なる。然るに主上此程より、御風の心地迚、病の床に臥給ふ。天顏を窺ひ奉らんと、御弟宮無品齋世親王、參内の御供には、院の廳の官人判官代輝國、階下に伺公仕れば、席を正して丞相に打向はせ給ひ、「今朝院參致せし所、法皇仰有樣は、當今

蒼々たる云々―婥約はやさしく美しい貌莊子に藐姑射山有ニ神人一居焉肌膚若ニ氷雪一婥約若ニ處子一とあるをとる

珊々たる云々―隋の趙師雄羅浮にて清麗の美人に逢ひ共に酒を飲み醉臥し覺めて見れば身は大梅樹の下に在りといふ故事

情天滿―心ありにかく

延喜の御世―醍醐帝

の御惱日を追て快然ならず、急ぎ齋世に參内し、龍顏を拜し、御樣子有の儘に告知らせよ、と判官代を相添らる。御樣躰いかゞ渡らせ給ふやらん」菅丞相正笏有、菅「さして御變もなく候。委くは道眞に御尋有んよりは、直に天氣を窺ひ給へ」輝「然らば左樣に致さん」と、時平にも挨拶有、常寧殿に入給ふ。かゝる所へ式部省の下司、春藤立蕃允友景罷出、庭上に頭を下ゲ、「今度、渤海國より來朝せし唐僧、天蘭敬が願ひには、唐土の徽宋皇帝、當今の聖德を傳へ聞、何卒天顏を拜し奉り、御姿を畫に寫し歸國せよ。其畫を則日本の帝と思ひ、對面せんとの望に付、數々の饋物、則是に候」と庭上に飭らすれば、菅丞相聞給ひ、「コハ珍らか成唐僧が願ひ、當今延喜の帝、聖王にて在す事隱なく、御姿を拜せんと、唐の帝の望は、直に我國の譽なれ共、折惡敷天子の御惱。有の儘に云聞せ、音物も唐僧も、唐土へ歸されんや、時平の了簡ましますか」と、仰に冠打振て、時「そふでない道眞、御病氣と申聞しても、よも誠には思ふまじ。延喜の帝は聖王でも、趨跛か瞎か缺唇か膝行か、天皇らしうない形故、病氣といふは間に合と、いはるゝは日本の疵、面倒な事いはさんより、御形代を拵へ、天皇と僞つて唐僧に拜さすれば、何事無ふ事は濟、誰彼と云んより、此時平が代を勤め、袞龍の御衣を著し、天子

瞎か缺唇―かた目かいぐちか

袞龍の御衣―天皇陛下の御正裝

鹿を馬―秦の趙高の故事

三善―見にかく

に成て對面せん」と一口に言放す、謀叛の萌ぞ恐ろしき。判官代輝國、階の下につつと寄、「事新敷嚴命、唐土の天蘭敬は、時平公の御姿を寫しには參るまじ。背上つて頤廣く、顴高き延喜帝、唐僧がよも呑込まい。神武以來獨の惡王、武烈天皇の名代ならば、時平公が幸究竟、當今の御代とは、鹿を馬との出損ひ、ハヽヽ御無用」と嘲笑ふ。時「ヤア舌長し輝國、踏れやつ」と呵り付、「ヤア〳〵玄蕃、天蘭敬を内裏へ伴へ。天子には此時平用意せん」と、立つ所を菅丞相とゞめ給ひ、「時平の仰は天下の爲、御形代とはさる事なれども、若は彼僧相人にて、君臣の相を能く見るならば、王孫に有ぬ臣下としるべし。其時いかゞ仕らん」と、理窟に時平行當れば、三善の清貫進出、「菅丞相の詞共覺へず。彼坊主を相人とは餘りな先ぐり、念に念が入過る。左中辨希世殿、そふじやないか」と指出口。イヤ是念に念を入てさへ、過仕落は有ならひ、假初ならぬ唐土人、御對面の事なれば、輕々敷計はれずと、暫しが間御思案有、菅「所詮天子の御代、人臣は成がたし。幸御同腹の御弟宮齋世の親王を、今日一日の天子と仰ぎ、御姿畫を唐土迄傳へて恥ぬ御粧、此儀いかゞ」と理に叶ふ、詞に違ふ時平が工、目と目を三善の清貫も、口あんごりと明居たる。玉簾深き一間より、伊豫の内侍立出給ひ、「兩臣の御諍、我君委

しく聞召れ、朕が代は齋世の宮と直々の勅諚にて、只今御衣を召替へ給ふ。此由申傳へよとの仰にて候」と内侍は奥に入給ふ。時平は俄にむつと顔、輝國が悦喜の眉、開く扉は日花門、玄蕃允が案内にて、渤海國の僧天蘭敬、倭朝にかはる衣の衫、庭に覆ひて畏る。「ム、唐土の僧天蘭敬とは汝よな。龍顔を寫し奉らんとの願ひ、叶ふは汝が身の大慶、有がたく存じ奉れ」と、時平が指圖に警蹕の、聲諸共に高々と、御簾卷上ぐる其内には、弟宮齋世の親王、金巾子の冠正し、御衣爽に見え給ふ。實王孫の印迚、唐僧始め列座の官人、あつと平伏敬へり。天蘭敬漸頭を上、玉體をつくぐと拜し奉り、天「ハヽア天晴聖主候や、我國の徽宗皇帝、慕はるゝも理なり。三十二相備はつて、いはん方なき御形、勿體なくも僕が筆に寫し奉らん」と、用意の畫絹硯箱、檜の木の燒筆さらくと、眉のかゝり額際、見ては寫し書ては拜し、御笏の持せやう、御衣の召振違ひなく、卽席書、顔輝が子孫か只ならぬ、畫筆の妙を顯はせり。判官代は差心得、捧物取納れば、「重ねて俸祿賜びてんぞ。旅館に歸れ」と道眞の、下知を請繼春藤玄蕃、御暇申させ、唐僧を伴ひてこそ退出す。歸るを待ちて時平大臣、玉座にかけ寄り、齋世の宮の髾掴んで引摺出し、御衣も冠もかなぐりく、時「唐人が歸つたれば、暫も著せては置れぬ、九

彩―えり

金巾子の冠―巾子は髻を入るゝ所金巾子の冠は天子の常に召さるゝ冠金の紙を以て纓をはさむ

三十二相―佛陀の相

九位でも―九位は位階の最下

聊爾—粗忽

神道加持—神事の祈り

位でもない、無位無官に著せた裝束、此冠穢れた同然、内裏に置ず我が預かる。今日の次第は、右大臣奏聞せられよ。身は退出、罷歸る」と御衣冠、奪取て行んとす。道眞立て引取給ひ、菅「聊爾なり時平、勅もなき御衣冠、私に持歸り、過つて謀叛の名を取給ふや」と、何心なく身の爲を、いはるゝ身には胸に釘、頭ゆがめて閉口す。齋世の宮、菅丞相に向はせ給ひ、「天子序の勅定には、老少不定極りなし、何時しらぬ世の中に、名許殘すは其身の爲、道を殘すは末世の爲、妙を得たる筆の道、傳ふべき總領は、女子なれば是非に及ばず、幼ければ弟の、菅秀才にも傳ふまじ、弟子數多有菅丞相、器量を擇て筆道の、奥義を授長き世の、寶とせよとの御事」と、仰の中に左中辨、宮の前へずつと出、「菅丞相の弟子の中、位といひ器用といひ、希世に上越す手書はなし。幸是にて傳授有と、御申付下さるべし」と云せも敢ず、菅丞相莞爾と打笑、菅「内裏に有る時は我傍輩、筆法は我弟子なれば、此道において師匠を差置、我儘の願致されな」と誡の詞、嚴々と襟を繕ひ、勅答には、「有がたき君の惠。我が筆法の大事には、神代の文字を傳ふる故、七日の齋、七座の幣、神道加持に唐倭、文字は何萬何千にも、我筆道に洩しはなし。それ共しらず爰かしこに、手習ふ子供も皆我弟子。今日より私宅に閉籠、擇出して器量の弟子に、筆傳授申べし」

御惱の祈願―天子御病氣平癒のいのり　加茂堤―鴨にかくわせた―來た　短い癖―短氣なくせ　行いでな―行かぬか　蓼喰ふ虫云々―人には好きぶすきあるをいふ諺

と、宣ふ詞は今の世に、傳へて殘る筆道の、道は御名に顯はれて、眞成かな誠成、君が御代こそ　三重豐なれ。引捨る車は松に輪を休め、舍人二人は肘枕、一輛竝べし御所車、かたへは藤原かたへは菅原、道眞公の名代は左中辨希世、時平公の代參は三善の清貫、加茂明神へ御惱の祈願、神子が湯浴の其間、眠るむまさは加茂堤、夢に夢をや結ぶらん。松吹風に菅原の舍人、梅王丸目を覺し、「コリャやい松王丸、そちが主の時平公は、短氣者でも根が大鳥、名代にわたせ清貫殿は、短いくせに根が惡者。呼使を請ぬ内、目を覺して行いでな」松「ホウ梅王のいはるゝ事はいの。こたなの主の名代に來た、希世殿こそ大邪人。蓼喰ふ虫も好々と、あの和郎を弟子にしたり、代參におこしたりなさるゝ、菅丞相の、お心がしりたい」梅「イヤそりや其方達が、小い了簡とは違ふ。聖人の胸の廣さは、此方等が身にも覺への有事。齋世の宮樣の車を挽、櫻丸とわれとおれと三人は、世に稀な三ツ子、顏と心はかはつても、著る物は三人一所、ひよんな者產んだ、と親父が氣の毒に思ふたをお聞なされ、三つ子は天下泰平の相、舍人にすれば天子の守と成、成人さして牛飼に差上げよ、と菅丞相樣のお執成で、御扶持迄下され、親四郎九郎殿は、今佐太村の御領分に、御寵愛の梅櫻松を預り、安樂に暮して居らるゝ。其御寵愛の三木の名を、我々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com